

数研 AGORA

▶「公民科を学ぶ」とは
 ／渡辺 雅男……1
 ▶センター試験「倫理、政治・経済」
 ／数研出版編集部……3

▶177通常国会から179臨時国会
 までに成立した主要法律と
 2011年の政治の動き
 ／楊田 龍明……5

No.57

この用紙は、再生紙を使用しています。

「公民科を学ぶ」とは

一橋大学社会学研究科教授
 渡辺 雅男

高校から大学へ進学した学生が最初に戸惑うのは、高校時代に学んだ科目と、これから大学で学ぶ科目との間に存在する、ある種の距離感でしょう。高校時代に習ったこともない科目が大学でいきなり登場したりすれば、面食らうのも当然です。それとは反対に、高校時代の学習科目が大学に入ると忽然と消えてしまうこともあります。公民科はその一例です。どの大学のカリキュラムを探しても、そのような開講科目は見当たりません。一見すると、高校までの「公民科」は、もはやお役御免となってしまったかのようで、寂しい気もします。ただ、ちょっと待ってください。公民科という科目は、名前こそ変わっていますが、実は「社会科学概論」というれっきとした講義科目として大学で開講されているのです。ご存知だったでしょうか。

そもそも、近代の学問(科学)は、その研究対象に応じて、自然を対象にした自然科学、人間を対象にした人文科学、社会を対象にした社会科学と大きく三つの分野に分かれます(文系・理系という区分けは、あくまで受験科目から見た便宜的な区分けです)。それぞれの分野では、ルネサンス以来、専門化が進められてきましたから、対象はさらに細分化され、自然科学なら物理学、生物学、地質学等々と無数の学問分野に分かれ、各分野がさらに専門化を

進めて、いまではお互いが別々の特殊世界に暮らしているかのような状態です。人文科学も、文学や美学、心理学や倫理学など、自然科学に負けず劣らず、専門化の流れが顕著です。こうした事情は、歴史的には一番遅く成立した社会科学でも同様です。経済学や政治学、社会学や社会哲学など、それぞれの分野で専門化はめざましい勢いで進んでいます。研究者は専門家になることを求められ、ますます特殊な専門性というタコ壺に入り込んで、そこから出てこれなくなっています。

専門化が進めば進むほど、人はその原点も、全体像も見失いがちです。ところが、現実には専門の仕切りのなかで動いてくれるわけではありません。閉ざされた知や硬直化した学問では、想定外の動きをする現実を理解できるはずもありません。そこで、いわゆる「専門バカ」にならないためにも、あるいは複雑な現実に足をすくわれられないためにも、出発点である原点に立ち戻って、全体としての自然や人間や社会を、あるいは、それらをすべて総合する「世界」を、全体的かつ科学的にとらえ返すことがどうしても必要になるのです。大学も専門的な知の教育機関として発展していこうとすれば、むしろ原点としての全体認識を教える科目を充実していかなくてはならないでしょう。「概論」という科目は、学問全体を見渡し、知の細分化を乗り越える議論とします

ます必要になるのです。自然科学概論、人文科学概論、社会科学概論といった授業科目が大学で開講されているのは、何よりもまず、自然、人間、社会それぞれのこうした全体認識を行うためなのです。

もちろん、社会認識の原点は、なにも大学に入って突然「社会科学概論」という科目として登場するわけではありません。学生諸君が高校時代に学んでいる公民科は、まさにここで言う社会認識の原点、いわば「原点の原点」なのです。そこには、これから分化し専門化していくさまざまな要素がすでに未分化のまま含まれています。未分化だからこそ、立ち返るべき全体認識の出発点がそこに潜んでいるとも言えるのです。

では、社会認識の原点である公民科をどのような姿勢で学べばよいのでしょうか。大事なのは、何よりも社会を批判的にとらえる方法論を学び取ることです。批判的とは、ものごとを根本的、全体的、相対的に(絶対化することなく)理解することです。言い換えれば、社会に流されず、かといって社会から外れることなく、社会という大地にしっかりと足をつけた姿勢ない生き方を学ぶことなのです。

そのためには、まず社会の総体性を学び取ることです。経済、政治、法律、思想(理念)をばらばらな個別専門領域としてではなく、社会活動の全体を有機的に構成するものとして学ぶことです。公民科「現代社会」の教科書は、大きく「社会の構造と問題」、「市民としての自己形成」、「政治と法の体制」、「経済の仕組み」といった領域を扱っています。これらをばらばらな専門分野の寄せ集めと見るのではなく、市民社会を構成する社会活動の構造的な関連において理解することが肝要です。

第二に、社会の経験性を学び取ることです。教科書に記述された内容は、あくまで過去に起きた出来事を整理し、そこから法則性や規則性を引き出したものであり、誤解を恐れずに言えば、いわば死んだ記号です。問題はどんな場合も生きた現実です。書かれたテキストを聖典のように暗記するのではなく、現実を理解するための判断材料、参照枠とすること、そして、生きた現実と書かれた教科書との絶えざる往復運動を繰り返すなかで、社会認識を深めていく

ことが重要ではないでしょうか。

第三は、社会の歴史性を知ることです。社会がつねに時間の流れのなかに置かれていること、それを理解することです。歴史意識をもって社会を認識するということです。それは「現代社会」という公民科教科書のタイトルに込められた執筆者の思いでもあります。「現代」が過去と未来の結節点(過渡期)であるという認識、その認識の上に立って「社会」を考えようということなのです。

最後は、社会に対して主体的に参加することの重要性です。社会を学ぶということは、社会の流行や大勢に流されず、主体性をもって自らの社会生活を全うするための知的作業を行うことです。「公民科を学ぶ」ということは、いわば賢く社会生活を送るための準備作業なのです。

さて、最後に、公民科を学ぶ上で忘れてはならない点に触れておきましょう。それは、社会の「タテマエ」と「ホンネ」をとともに学ぶことの重要性です。「タテマエ」とは、表向きの仕組み(メカニズム)のことです。社会の経済や政治、法や人間関係が表向きどう動いているかを知ることです。ただ、そこで終わってはいけません。そうした「表向き」の「タテマエ」の裏に何があるのか、何が隠されているのか、皮肉屋の目で現実を暴いていくことです。それが社会の「ホンネ」、社会の矛盾、現実の背後に潜む「冷徹な原理」を知ることにつながります。もちろん、「タテマエ」が嘘で「ホンネ」が真実であるなどと速断されては困りますし、理想的な「タテマエ」を素朴に信じ込んで、薄汚れた「ホンネ」を道徳的に断罪して済ますような態度も、正しい社会認識への一歩とは言えないでしょう。「タテマエ」も「ホンネ」もどちらも社会の現実です。どちらもしっかりした理論的かつ歴史的根拠をもって社会に根づいた構造原理なのです。高校生ならうすうす感じているこの社会構造の二重性に正しい説明を与えてあげることです。それによって、肉眼や常識では見えてこなかった、社会の隠された「シナリオ」が読み解けるはずです。これこそが、教科書を越えた、その先にある教育現場の課題ではないでしょうか。